



二聖圖書卷第十八 目錄

戸大なる事のり

公方様山道具失火の事

高尾山瑞龍院の再興の事

利常公の勤の事

江戸の天守考の事

徳利公の山方の事のり

江戸海軍の条の記述の事

利常公の勤の事

近頃の人の事

運葬の事分 又川左の事

保田守の事

利市公の事

宝勝寺千岳和尚追悼の事

江大寺の事

明曆三丁酉年五月廿九日江大寺の事
と云ふ事の物語の事
乾の風も走つて塵芥も天に吹上る人の面
みえさげれ言わぬ事
宗廟寺の事
江大寺の事
外為秋一夜に焼立る事
出立の事

平野の岡の等八丁場の山毎新松平御前寺及の太屋
秋一面の山と成る或方人の男女け出能せれり
此命定は海に其押行り小岩巖寺に中堂也
元身つまるしくの山に傍堂ふとく多火の山と成り一切
元生今うのちも海中に心をいしく死を信者多子
万とふ救う志くると伽藍の猛火盛れやあ人三度
乃走火の猛石ヨから海にうとく也くひ分下火子ひに
しわいまをい火まといり水火のせめを逃く色は死る
若き方人余海に救て佃島石川大隅を外の世家お
とくくちのこしお焼死とて其日の末刻よと西

風流をそそぎとく能田の山新田口寺分場丹後志田
海中村松町分柳原和家及橋焼通り須田町の火一面
も通る所也初折之新寺分小寺もあま西布新寺も
初も中堂よの元身とくは家よ江戸町中の家
城たおの山とくはつと寺小寺作るは海に家城も
と標よ海にとくは橋火と加てせめくははちりも
と如よけり中丁の火に信る町おのうとくは
男が家あえの山とくはつと寺ら長お書成衣新寺
を揚つとくは海草とくは折折のりけ言新屋の山
なゆ石出帯カ靴の山とくはつと寺ら長お書成衣新寺

て何方と云ふて令わす火と云ひ申すは清き色
もわすまきと申すて元放と云ふは立止もあまきと云
まふもよりの火燭の中を引介ふ火志のり
る昔あつかり各節節力と尋出して遠く色に節力多
うもまひつて光中や元光中や元光中といふ
美の及んばゆると皆悉ゆらまきと云ふも
さ中と云ふの火事は罪人たなをりて元光中
よあす我と極火よせめりあまきと云ふも
空申の男女後節節力と押りあつる天魔のいふや
らん非のこの世の世をいひ打てり定か記のり押

年定のりて海よりよ極き誠く押約よ去の極も心
と云ふつと色分りあはれ男女大桶の節と云ふ死よ
りり大つよあまき極地のうあまきと云ふ極も心
あまきり内た右の極火の端は雲より極のよ
下の金より火よまきと云ふ死と云ふも去りて去の
由知やと云ふり柳系の大節節力と云ふ大名屋後
新と云ふと云ふ節節力と云ふ節節力と云ふ大か
あまきと云ふ節節力と云ふ節節力と云ふ節節力
まも節節力と云ふ節節力と云ふ節節力と云ふ節節力
よ節節力と云ふ節節力と云ふ節節力と云ふ節節力

東寺其家あり敷百人焼死を其始にの言と
如て川ヲ越きて新田子の之舟を家あり
らと居り如田島斗あり

同十九日火事の様子

明色十九日焼死ありて今迄を尋じたり
親兄弟の志の志の志を尋じたり
赤坂橋を食棚中とありて焼死あり
ゆもわりの焼死あり家のり居形とのり下は
市を立ちわたり食棚の管の古金及具等
て物をとりわりの事大風なる事あり地盤立

今西とてなりて新色院表門大書
字力の考より火の出と思煙二ありあり
のり焼死ありて今迄を尋じたり
とてひりりて告符守の字を察ありとて元
二十丁字方の言れありとて水戸表門
のり焼死ありとて今迄を尋じたり
火のり焼死ありとて今迄を尋じたり
守二三丸ありとて今迄を尋じたり
及土井水野ありとて今迄を尋じたり
京安者土居被りとて今迄を尋じたり

一番のんといふ大なる河のほとりすといふ橋の流は
ち橋の肉のたる所をときも橋の肉のちく南北に合七十
歩の年の傍にまはる所飛たはる常橋をとり
かゆのちと所をたの神田のちのち所が分多橋のちま
て道とて神田のちとをわたりはる(引をとりを
くも石をとりて総利のちとをとり大橋のちと受く
ちありとてまの橋のちとをとりはる(引をとりを
乃信のちとをとりはる(引をとりを
さ所の神田のちとをとりはる(引をとりを
大せうのちとをとりはる(引をとりを

と云とては昔やうといふも総利のちとをとりはる
の神田のちとをとりはる(引をとりを
活強り神田のちとをとりはる(引をとりを
ひもやといふ(引をとりを
押のちとをとりはる(引をとりを
世世界のちとをとりはる(引をとりを
は神田のちとをとりはる(引をとりを
ちもやといふ(引をとりを
のちとをとりはる(引をとりを
りさ(引をとりを

中流南三之所東流武町すの内は方々をせまらば
敷敷り八千四百方分焼死す責らまきくはり死す
比るを分新橋本所水谷町紀別屋列兩
公の爲を友一財す所と如奥平赤作彼乞十八赤
乃花屋友み分焼死す鉄炮別吹行くを日周
刻海名とす火の留んがゆふ火始すも海に流し
たり又申し下刻す統所も丁目方又出火に松平出羽
同敵方同但る山王權現天神も社悉焼亡ス紅葉
山子縮寄のまうく火をいあやうりすくお長神
威子怒息く風も火ををりつて西の山凡々至る原

後幼奉り何とせしはり入南方の大名少流た火死花
そて井仔掃初上枚弾心毛利黒田信達瑞徳南秋
三田丹羽相する京極之次人妻板倉三万流野塔井
柳けし小出名中首分も事去りすもろくすを
あし危立ちむし屋敷九即時は鉄炮とるは西丸の
下分と安部を後堀田と野木野監物山染稲葉大久
保木稲梅田屋をりわこの下を押籠りする秋
月照也中川流津一柳山塔植村兼中分秋大流鐵
回れりる字の中流を元利毛列のり屋友を
流を初りて八十を赤の屋敷をりるも

成て梅田の火の多つたの事ありて如く海邊より
とひつゝの燃料肥は多下る事ありて其の爲に
芝の濱より数石十八条増上寺の物化寮拾五寺
表の神明本堂神楽堂護国堂之外の小社元
あつたを去つて五條増上寺の南に十所余芝の
三丁目焼色下灘外に数あり刹風も止つては
さくさくあり増上寺権現堂中堂台徳院
殿乃石層所其臺所の石氣堂中堂經藏障樓
塔山門をいれり火も焼りて芝の濱ありて
竹らむて死人のうらみ多きを集めてせむる事あり

堺の牛馬のふはし六河宮方よりあつたを打入
りて入埋り記ある所也西上流より入りて数合格
万二千余也と上りて天中ありて坊つてを万人坊と
名付又之縁塚たり諸宗山無縁寺廻向院と云
寺を建てる増上寺より住持より住持寺乃僧衆
あつたり午初経誦誦一七日名助念佛の道場を
始りてふらひりて山北より難る也親親縁者目と夜
この集りて住りてふらひり念佛の声哀ふし殊務
少くも元前代末の事也火の多かりぬ事
江戸中より一粒も本竹を叩きぬりて

此は伏見に伏して食糧をたかしくせしむるに
福をうけてくも君をかくる業をうけてくも
さへ甲斐をたかくて死なむ方か今ももてを分
國乃大名を断てふをせうく方とせうく奉
有沖城の内友部力松浦肥前守は年々お
田中橋成橋新橋おくらゆとたさ毎日施
させたり白浪を方貫自ノ所食た少屋を
ゆ成よ以下り江戸立寄り大除お多
あつた家一軒一金子七十兩元よ多
てうらり依之世ら又かのとく河並よ少
高き深く波をたかきえの江ふらり

公方様御道具失火の事

今夏の大仕事よ上様千日代大名小所守社
方よ年と多かりのち御宝を宝た幾方億と
焼失と御事おし及るも公方八山及七
失の北西と別る天下の災力山の相協
号の幾千年屋とも相事あるをば
絶りりり惜事うらり諸人奉
弘平の先記お末世の物語の
石動園行骨喰言先紅雲正宗天下
好郷寺

本郷九文字初爲郷西方郷温海貞宗以外式
百牧の内外郷正宗の内刀牧多々是元畧之山陽
扱ハク後友軍部事近友軍部新弱友軍部扱友
軍部志の予友軍部扱友軍部山条友軍部以外
之百牧の内外の内陽扱友軍部山条友軍部以外
三十一對馬正宗長銘正宗利常公元八情正宗横雲
正宗道雲正宗宗近 行年 武内次三介
因次村雲當麻手坂阜國吉醍醐屋國吉珍屋郷
北野紀新大吏大國綱吉光一振影秋田行平之九
行年宗近大坂切丸貞宗以外百牧内外ハカハ

畧之依之世中ノ古作ノ道具大切ヨアリ二倍マ
ハリマシムルナリ抑々ノ取リヨク出ルル事新古
ヨクハハ代折紙也出シキ也公儀ハ印河旅
家ノ法印後何道モ出ルル他ノ宝物ノ幸危
テト柄ニシテ是レ全物トシテ其世ノ及ビテ
ス所ノ取前ノ上ナリハ事ノ事ノ事ノ事ノ事
其古物ノ絶ニ事カシク老ノ事也

言高湯覺院ハ再興ノ事

我申ス高湯覺院ハ中納言兼肥前守利長公ハ其書
提所也寺并ハ墓所ハ造管テハ其ノ事 保永年中

小山の北久の海傍の奉納の成就といへる所寺
塔頭繁久寺の建之成也といひ寺の首寺の山に在
城の村海老坂の飯多の寺といひ此の寺の奉納の
るるのれは今の墓所といふ事あり也相如暦年寺
に山大の山と名をたの喜廣の寺は作身元朝の金山
寺の相如と小喝の作りを説く寺といひ好出来
の奉納の歴といふ事はお法法後今を此の寺といふ
るは小山の寺といふ大如監の寺といふ成就といふ大方丈
といふ寺といふ靈の山位辨の寺といふ額といふ

ち瑞龍院と隱元禪師の年位也御佛殿の唐佛
乃釈迦如来兩幅の大現達摩の表の右并に文殊
普賢の二大菩薩額の右同筆也大佛殿の三字也
禪堂の陳如尊者の安置といふ額枯木堂と
三字也天庫裡の韋駄天額の講釋堂下書象寮
同茶堂小方丈の式臺也小庫裡の飯臺座浴室の
湯殿の跋多波羅尊者の禪頭の雲隱の鳥首
姿摩明王樟樓堂の鐘銘の隱元禪師の文章也
山門の觀音大士十六羅漢鎮守堂の大慈大悲之
觀音薩埵竜天白山の勸請と抄本といふ二百名

乃寺願也永代寺附せらり御事入寺六百五塔頭
東漸菴法性菴材洞庵龜占庵康見寺等以五十
石二十石充寄附せし所は若事湯ノ内未毎半年宇
治星野上林より新菴より造り上之日夜の湯作
其地勘午未申と年乞之と年乞之と其書信も未
之信も地乞事九也天下乞取乃大伽藍法堂堂の
寺造り出ぬよハ法教とん所自とあくらんせぬ
六と母家習とつとくらん所報恩謝得の心と
甚と流乾の孝養事とくらん事凡也此仕事
相済者五八二門中并は此老中進ふ小佛殿

此等の上の仏具は此の道有る寄進中へ寄り及
び

利帯公の事勸之事

同月二年三月廿一日の御事奉教のわが卯月二日
小所刻名公方御事御見の後方に此の道也此使者
乞事とくよ名由成空具事おひとく物よ此仕事
家守社町方の御教凡は年皆つり事此の道奉院
極の半邊の御事奉教御後由とく一力丈は
魂より乞事とくよと利帯公の御事と此の道今校
民御事奉教の御事奉教の御事奉教の御事奉教

葉通るうての事歟と云守の如く流と水宮の
中と九歳の子孫短うつて母後長三歳と云古是短
少人高人討古も今日の時一歳と云ふらち中
急に江戸後一と長三歳長く人定九と身は持
今夫と云運業の如く遊を遊とて何と云ふ
以押を打破大徳の分門倒とて是は徳の信
乃若貴家賦と云除音の持と云ふは子と云
もいふと云かたの事か何らうわつていふ
上ラ下と云にちり然れは協成左の中職と云
山老中と云く母と云は漢秦院何と云丸と云

の元中我言及福利と云は廿二日に出可
るる如く富貴もよなくは山名別と云ふは
中納言及事外山殿立也といふ早と云若地
口と云可如く地と云ふは青と云中と云色は山
と云は然一といふは直おの如くは山名何と云
也若地と云は身と云若色は山名何と云
為は山名何と云如くは山名何と云
お後山名何と云山名何と云山名何と云
山名何と云山名何と云山名何と云
山名何と云山名何と云山名何と云

後にはとていふは近き事なりとて後にはなりとて
は田家や家業を以てして後には此の事法に依り
並国等口後へは是の上層を以て遠く外六條の法
乃事と成るや後等の中より此の法を以て徳利と
復後へは三宮の部層を以て書法に依り中
用は是等千方の用とて常事と推知なり

沖天守層の事

万治元年戊午年山城守乃山つる方とて橋の
山門橋層未修理致務造官の事天下に後候も
此の事被仰身別る沖天守層は石垣の徳利とて

程嘉り色に別へ江作を郡中の命是とて年の収納
も意に是を扱方記は後とて人々千人は書
家中の出入用割符とて知りては是の事
四子貫目由又書の中村新造は田舎守平井公
書出は許是控を指しおはるは守人守人の事守
先南の書法を具ふこの事書之の事とてえり
年内より此の事守人守人の事守人の事守
七十守り大徳法四の麻草とて書集り書百書
たつは守人守車斗り指しおはるは守人の事
とて書り書百書指しおはるは守人の事

常云此石切七と云々也石切の目録は法作
付義濃屋店に希を以て大坂平木の目録に計定
未明りり七つ計りて利常公銀利の利治云此物法
成法作計ありより物へん事は計其と四千八石
切りの巻ノ目方も是代一上削り波に計り後とて
盤ノ面ヲ上絶ヲ三削立へ計りて也九月上旬
ハ天下の修理寮本本本二既目録より出之様以
波計毎田中村本出此角場ノ目録に計り後ス先
年の天守巻を八寸のひととわりの比後ハ巻
重のひととわりの波計毎田中村より計りて巻

と云えり此の天下無村の名人也と天下ノ修理寮
ありて是の事代との目録ありと此を之計りて是れ
の肩をて同ノ目録に計りて是人是元高合手倍り
ハ天守ノ名垣九ノ九除計りては是六年と伏
波延延分計りて是人金銀とては是と計りて大計り
不計りて貫の上大重計りては是と計りて又いつの世
より此の目録あり人金銀計りては是と計りて大計り
九ノ九計りて波金銀計りては是と計りて大計り
九ノ九計りて波金銀計りては是と計りて大計り
九ノ九計りて波金銀計りては是と計りて大計り
九ノ九計りて波金銀計りては是と計りて大計り

おうくと依之餓死とてかたし

徳利とていふ方楽し入りの

万治元年戊戌七月廿六日俾科肥後守とて之公、姫君
と徳利とて嫁娶せり、由とて公方様、此後多可は作
付、此存念、如く先年光高公、此前、公方公、此
多可く例、此方、此如、此方、此度、此多、此可、此
多、此可、此方、此守、此多、此可、此方、此守、此
心、此は、此多、此よ、此池、此之、此と、此国、此と、此出、此と、此之、此の、此
方、此より、此田、此の、此方、此と、此乃、此ち、此せ、此え、此ひ、此池、此の
此、此方、此多、此事、此多、此よ、此と、此及、此こ、此守、此堂、此嫁、此娶

之を懸群集とて、此のこ、此の此、此又、此婦、此た、此天下
乃、此孫、此方、此方、此を、此六、此法、此の、此池、此之、此也、此也、
此列、此記、此も、此不、此及、此前、此方、此家、此先、此と、此は、此世、此を、此
加、此列、此分、此海、此ん、此た、此を、此也、此也、此料、此以、此の、此昔、此川、此若
此、此の、此取、此か、此り、此千、此里、此と、此三、此束、此之、此橋、此橋、此大、此友、此
此、此束、此若、此の、此是、此束、此之、此金、此の、此法、此事、此海、此金、此の、此何、此方、此先、此
此、此の、此守、此金、此若、此の、此松、此中、此店、此大、此の、此高、此の、此使、此の、此日、此野
此、此束、此の、此借、此仕、此何、此と、此神、此田、此よ、此少、此屋、此と、此後、此の、此持、此持、此
此、此束、此若、此の、此と、此は、此は、此若、此度、此友、此の、此昔、此の、此人、此の、此前
此、此束、此若、此の、此と、此は、此は、此若、此度、此友、此の、此昔、此の、此人、此の、此前

ふかやうなる福の徳の色を今もた死たの
とそ中よと根を具の人より又勝の男志の女も揚の
者も有徳人の名を命を色をわたりて思ふこと少事佛
ふかやうなる色をたれに思ふこと少事成りて故に色
をよかりし所宿縁は依て因果歴の宿業を常の
法流りて説くは皆物象のよきもの智恵もさへ及
るとちるを先謀みか邪氣の致す也一日よと
其後よはよの首より天より花を詩とく他か中於の
とそを稱名よと意するをうとて培ふ又中よ七十斗
は言ひつゝもたれぬとてとて各を作らうとて

わさびの火事、法へのあつても斗かしたる又た
つりてさうしてさうといふもの長湯堀の京大坂長巻のま
つろ外高きう人多くまを伴ふは具衣敷建書物未だ
よと海とを事としかく常拂たき使ふ土産物も積
まらぬとて自酒世に水ぬき勤とたえうとてあふ
せと毎元席よあり伴物もさうぬきぬきとあふ
とを巧むと作也人迷りて常後とて事とて夜思
あふと伴物よと名の火事よ依り被書物底の拂賣
酒又けしよと伴物よと作也常水若絶つゆと前
法りて書物をさへけしよと伴物よと交後とて石と

後天不足と云ふ瘠弱を治すには、入稟の力を
専ら採り、所方より、十二秋、田圃に種をまき、
世に種をばらばらとせしむるは、穀類を
之を成す何れも、其の功、世に成るるは、如く大
火事、子分、子分、男子、其れを、子分、其れを、
かく、代出、候、まを、酒、以、貧、事、忘、り、以、外、世、
民、其、業、之、子、暇、を、く、心、也、世、に、流、之、と、一、の、う、も、あり
今、か、者、也、い、う、も、世、に、候、を、所、の、罪、科、に、似、し、候、も、分、か
之、先、其、言、の、右、と、も、也、罪、を、か、ん、ん、も、も、も、も、右、の
竹、子、の、似、し、候、數、業、師、を、出、テ、中、の、り、の、右、に、候、也、然、る、に、

天地陰陽の気、其れ、一滴、水、か、お、し、ま、く、お、し、ま、く、
左、秋、冬、土、周、の、氣、の、流、く、目、に、夜、に、お、し、ま、く、血、を、
目、に、夜、お、し、ま、く、午、五、百、息、の、呼吸、の、り、よ、十、五、百、人
の、也、其、陰、サ、も、及、び、陽、方、も、及、び、る、に、百、千、丈、を、
夜、百、刻、の、候、及、の、と、ん、ん、の、り、と、め、ら、ゆ、こ、も、と、氣、血
此、の、九、陰、陽、の、字、和、光、也、い、何、の、病、と、い、ふ、事、か、し
愛、の、喜、怒、憂、思、悲、恐、驚、乃、七、情、或、は、飲、食、房
田、の、大、を、不、及、し、依、り、候、の、及、流、り、五、積、六、聚
の、病、と、い、ふ、氣、血、の、今、養、と、最、明、守、る、事、
と、世、に、候、の、お、し、ま、く、事、を、と、め、ら、ゆ、の、り、の、う、つ、候、

と述ぐくは上の海天下の泰平多しん語るは
その中なる心持もくみえくを中なる花の根今
交の大事事ハ以上の之大くも其を野も老及の何方
も海の中をそが脈の心目よりも瘡痕多し其交を
云ふ也ハ教業師の心持ハわらわら心持もくみえ
そふくもくもぬかしくも其を根持もくもくもくも
同テ曰く大事事ハ其野も富先女又も其をそを
只そ其を其もおまての事おはるもくもくもくも
病弱の心なるもくもくもくもくもくもくもくも
よはよはすもくもくもくもくもくもくもくもくも

よはよはすもくもくもくもくもくもくもくもくも
やと云ふ也ハ竹母も其も其も其も其も其も其も
皇より事記も其も其も其も其も其も其も其も其も
よ切山り高山く此道人も其も其も其も其も其も其も
てみえはるもくもくもくもくもくもくもくもくも
もくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくも
死の心も其も其も其も其も其も其も其も其も其も
わらわら心持もくもくもくもくもくもくもくもくも
也其も其も其も其も其も其も其も其も其も其も其も
ハ下流也其も其も其も其も其も其も其も其も其も

道立せんくは色くは法師の治大ニも授人合本日因
此にお腹を籠りく出身紋より田舎に返りて
老駱の群集を也形を以て入用ヲク夫もつれ之ヲ拂
及んとて内は宿坊と宿死とを夫も十何はまじき
ねるく志くは得違場へト云先申分の作中ニ去
堂に由れなく所地ありといふ能くして一節名は作後
るを奉テ其御堂ヲ遠拂方内にて法志る也
とも其日かといふ事の合張りな事感念を
たよもつといふ事ありて此はと申すこと
不為也夫も此大なるの枝も申す事ありて定て

あまの三千三百と千と此の觀言妙智力や成候
いふこととていふ事ありて其の徳たはる也
此の形をいふ徳たはるといふ事ありて其の
いふこととていふ事ありて其の徳たはる也
此の形をいふ徳たはるといふ事ありて其の
いふこととていふ事ありて其の徳たはる也
念作中りて所服ありて居候ラ水手面白キに語傳
ふこととていふ事あり

和常公の題云の事

因平利常公の保科公之公よ言ひは所候今早思
あまのあはれ事ありて其の事ありて其の事あり

少くも事絶えむの一人も誓ふ必死の心あり
をりて色をたてて平三をとりて是計りて中
のいひて徳をいふ色をいふ如く収方田道公息つ
神をききたり心脈のいひをいふ少くも人
物名子あねらう初何と云城せぬ今も
お祈せしむるを夜あひては先んて幾千人
破換の書情もいふ回乃浦を業ラ止ちつと年感
てのよもいふるをいふ也か多政長橋山忠次奥村庸
禮正由孝憲津田政憲と外の人お到る何と云相後
より遺骸をいふ箱成奉りて居間よ佛壇の
うき

宝智寺より老僧へ小松園松寺の住持お副毎月毎
夜は供の茶湯香華を飯なりは傍御志く
お祈のいふるは是葬可付てつら志川
病

追懐のいふ事

竹田市に市古市た近ぬ人のいふるは
勤はくは後垣のいふ神を
ありて過去にいふ脚いふ
人といふ夜たなくは来んは
と云えたり市に市古市た近ぬ
大物

自然の事と海にまゝに供せしむるは
是をウラヤといふは其のいふを
あつた海にのこる葉を捨てるて
是は六法に別るなり

堀江の事と年令は減出能く
乃時分核同の舟を城と
て城也と字を物と
押せしめ我との事なり
のつとらふは打あさ
正なる響も波も煮
作らるる事なり

り抄の今多分合して
利常の正身は立
敷は女房作儀
乃世の志を
供とて其の定
世の名を
つとらふは
を昔海を
て名を後世

古市たは
金櫃

焼香とく坊に希圖来んは焼香と出くはるべし
付後利込の正尋の爲まき中よりは家来出仕敷く出
向ひて西使の事一せは中喜居の宿所立入の事と
らんとは事也いぬ人仕別る事やとらんとは事也
候毎加賀守様は知のよしは正尋の事と出仕候
又利常公はちん進む付法公を上光高公の仕別せり
い及に八松備ありて市之宿をとりはるよしは事也
は如の利常公の仕別るは正尋の事と出仕候
利常公の仕別るはせりて候はよしは事也
なせとるは西使の事と出仕候は六町あり

又もあがの如くうとたをよまあせに付きいふ
近所の事言つて毎宿をなななるは御宿をたす
候とあはれはつて候はありなるとは事也
借とあはれはつて候はありなるとは事也
と物ありあはれはつて候はありなるとは事也
月より西使の事と出仕候はありなるとは事也
わくわくは西使の事と出仕候はありなるとは事也
とて教訓は作らした近先を畏なるとは事也
とて西使の事と出仕候はありなるとは事也
候と西使の事と出仕候はありなるとは事也

三河子焼香志々々
一睡の夢とこれの合意は後して
可くは心也辞せよ云

不堪君惠断腸患 眞命切渡暫還

三十四年風一陣 吹向物外雲花天

御遠葬事付 只以心事

下徳美郡之志野にお移るは川左の連山供仕上りて

くろ乞瓶のな居くこと守及も是る五篇皆空の心種
を現し海舟の上我とさ海とくく存望のら八洲靈
前の心行つうちあせんと外ありとく松法神志の目
夜勤の志くこと守及も是る志野の定村火と山本
沖若舟の相系ス之志野の火居つ立垣結の志四門の立
白土テ上之海舟にて白飯の水の末を傷或はあふと告
そと奏るる志の志野の焼香自奥村周傍に江作舟渡
海舟利心志の始なり大志利治志の志及心種志
初志外心一門の志申行志之志野の志備志の志と
らの志及心種志の志別志の志三四年の志今志又三

早志く別る世も宜くあり人色故も高塚友とく三
宅野の石段多末動も守師の宝多守の和尙念誦の因
松守の石段此儀式を色くもお世何れも退散あり枝
か忍多末の世村の末野の夜も遠離終土近
末淨土の心も多末の見布奉り聖日遺蹟月ノ電
恙も納まらせもお世の奉りも野の心も遠行此
の月も多末の末元也かそ品川名の今も心も事
外も野の心も供り行國方の守古も多末の世も
衆も多末も旅泊も多末の心も多末の世も多末の世
言も別りも心も枇杷酒も多末の世も多末の世も多末

色も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も
井も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も
末動の心も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も
も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も
打候も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も
をんも多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も
仍多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も
也多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も
一も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も
も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も多末の世も

便由る病中の書生初く心念以の筆筆九筆張の
其ころ一依之作功菩提乃爲まきく同堂米百石
を亦示守法能ち極示守けに之ち之具供茶湯料に
以りて事成。至テ寺迄始て之物こそ爲まき
之寺の分をせし所候まき新まきりて其今由候
後まき古爲二心其具加致候まき存思之病中候
津田玄善奉初めく始に代官中候御守百石利益
を奉まき以之寺建志の後此之用多まきとて津田玄
善候及由候まき古爲一支配は此との事まき
古爲情力くも許まき此の事電執の御事候物

似し所也まき中然し物ラは古善兄候物初初に
下りりて其末候物此執念のあまらまき其城内
物多まき古も亦其美候物似し所せまき其
公にまき其心まき其由候物其妻之蜀の事
揚貴妃の薨鬼ヲ守りて蓬萊宮に到れ地都上
に守りて其神液御白川女の子を候物似し所
石具之山担御事まき其間人いせまき其御事
其一其川たつて其心まき其あはれまき其
付の脇田在候まき其御事其心たつて其
御事其心たつて其御事其心たつて其御事

然るゆゑよりてしるふにせむと名料い家の先途等と
と希中より見那のるる海物語と出てるる多分は純
とありて色もつとよとつりといふる安之なる

利常公沖遺物之事

一 公方様

朱判正宗公脇物 目貫友子書紙七夕御免御終箱入

溢瓢沖茶入 袋ニツ内漢島金襴

定家筆 伊勢物語

一 巾着 急つふ 水戸中納言様

一 中古茶入 北田左衛門尉 保科肥後守友

一 書儀口寄香炉 びん子 同大之助友

一 鶴乃鉾 若志庵筆 日新御友

一 土佐守屏風 源氏白 同肥後守友内納言

一 能言口唐茶入 松平安藤守友

定家守御也まもり男

一 古今集 為遠守 同御友

新渡重

小判 五千両

一 平野文琳 松平彈正友

一 土佐守屏風 扇鉾御鉾 同沖内納言

一 夏子集 公頼

浪子 武田

一 信田脇指 目録

一 延壽刀 目録

一 吉磁口家香炉

来国俊脇刺

一 古瀬戸肩衝 計屋

定家掛物

江戸七宝

大弘行刀

おしり

長巻

源也国指

同又

松平源氏守

吉光小脇刺

浪子 千貫目

一 古瀬戸肩衝

一 休二仍物 住吉

橋本

九ノ刀

行光小脇指

銀子 千貫目

一 活拾遺集

一 分書巻物 亮仁

松平虎弾守

同奥

お梅

淨子 三百枚

一貫之集

小判十枚

一益丸壺

井戸茶碗

古江口

丸書若小脇粉

金子

一仔細地信 負數字

辨能重視箱

銀利公印印

市國表張反

公能印

金子 百枚

一安家筆 奇書

一拾遺集 右相字

新汲壺

小判 五千兩

一長恨歌 奇書

一仔細地信 右相字

一六神氏屏風 二仇字

八條杯

同姓君杯

若君杯

常照院杯

女院杯

右之外史記以之於家集之書若云以作書此也實是
也不及記書之

宝勝守子岳和尙追悼之事

此道玄の心依此依は横山奈の忠次と成せし是依事
以用人親よ志しうくたまはくは増ぬはるり正に金法
乃は年富元せんきこましく此依の像たより下は持持余
我者少和より人全返り我者少和我者少和中は相改
其者本まゝ此割場やうくまゝは依後中おし年より
此十人の目まわまり後持守者去又依好の老元ハ
此依の老ハ所柳田守の常事ハ常事ハ是是依根
をもちり身ハ野山ハ依依多事後此ハ免わ
是と持守とていりてとと改て示す存此ハ父ハ持

退六天の心通をこころは依事とく追身切腹は作
付日ハ乃私えわらうりて此依持燈守子岳和向ハ是
乃厚恩報謝の者せ先と寸志ヲ以テ報せん追名
此頭ヲ書テ此牌前ハ納奉ん

万治元年言中納言利常卿物遊去傳梵与子岳
追悼詩文奉捧

加越能三列之隱君松平中納言從三位菅原朝臣
利常卿今茲万治元年著維南茂暮秋賜書此幕下
之官殿飯回隱坐未幾十月十二日被觸于境風卒
然而逝去矣士農工商靡獨不傷悲就中思愛甚深

之意從者首晒作備者即日有致死人隔日有猥嬰
杵臼思人又有俄斃於寔陪臣侍士之傷不埋之所
尽情之所究也干然野僧宗仗幾內根別之產東漂
西泊之後投老於加列城下而過一生於鉢盂中之
所去承應甲午之秋七月不意呼令登城彼隱君告
曰當城良岳有放利名曰傳燈雖然屋廬湫隘柱石
傾斜唯存故基已而若作和上終焉地者即可作新
矣天心之餘咽千老淚不獲答而首肯臣高八月上
旬課迺作寮打教普請善尺表尽翌年三月落成矣
不移時日入寺自介以際酬恩謝得之日未幾卒隱

君頓逝訃音落耳似比丘亦落鬼斷鬼濕却袈裟角
者也時移夏去老淚之隙綴不弋安牌中七箇字於
句上置姓講官名於句尾而追悼者七絕不憚高覽
遠識人不顧秃笔他日奉呈前君定中有照覽者似
比丘惟幸

一生受用欲歡惊
子葉孫枝長益代
峰尖岳險衆山勢
多少錦囊捲不容
太平俄移似肖公

可惜不連橫合縱
仰高千歲太山松
國泰安民太守情
長季想後意和平
永陪慎下合存忠

啣甘辛苦守其國
居仁處義不合心
月捧家資三國賦
士重死兮臣重恩
黃門深鎖蕙山裏
神功難飲從三位
想是此公丈夫人
後規德行至公道
痛捨身心休慟哭
萬治元年戊戌仲冬

改有無過不及中
武勇向步文道答
恃无出恃亦無納
尤之腹右之斃
掩室杜詞終不言
退筆力量猶不異
郊居深被謝名利
煩惱菩提成佛場
出生入死不違常

之任妙心現傳燈子嶽容蒲拜

前黃門乾公大居士指館舍之日金籠既移野外有
令不能相從賦拙偈一篇以述早德云云

一道恩光三十年 袈裟濕却夕陽邊

北邙咫尺不能倒 空疑黃雪向佛前

右件の二紙言其の心牌前奉飯了回向進言語の
かゝり利常公の道去後総利公の末以初若の事の事
保科肥後守の之公の心後見ゆゑの事の事の事
の風俗も非ざる事未の事未の事未の事未の事未
老中も合く今以時言出の別と一と事也若也

長江の女史今如之借事蹟不可為息緒之
我意之先の守を六戸に注をさす滅亡さす借國名
乃由降方さるる六戸に注をさす下之命急を
載せり先何さす由境の心ひを前かたう海とて
の今よりひ又心ひすれ事かたひ忠意私あく道意
とらりし公使は自今の内用由境公倉山に後事
江降お勅山郡方心收納さす借奉りし是れこの勅
定公使用場さす心事とて外心借奉りし是れ借方心
下は下は是れ下下之事た別場におわらるる借奉り
合意用事と号して借奉りし是れ借奉りしは

命は但てお借奉り 是れ借奉りしは
六年十七年中松西隠居若く別帯山大おとさるる今
はかて我を借奉りしは借奉りしは借奉りしは
尚若しありし心知りて久く借奉りしは借奉りしは
らぬの心は借奉りしは借奉りしは借奉りしは
は。俄に少松のお名に借奉りしは借奉りしは
七走心ひの作事とてかひ今伏居居の心とて
殿様心かたは借奉りしは借奉りしは借奉りしは
出さるる又借奉りしは借奉りしは借奉りしは
好とて心ひの借奉りしは借奉りしは借奉りしは

をいひやまを村長中松全段入道書信出せり
抄本旅行不及中本撰りし居好まき日
わき物未底ヲ拂テ書出ス氣ヲ用者ハ斯
物及々しりともわきあひ入るヲ出
て利常公の心ある年の山内乃おろく
百歳の物おしん書ね母友おのり集ん

二重野書巻第十八終

